

「天皇・皇后のパラオ慰霊の報道に思う」

2015年4月27日

上記の表題で、下記の投書が4月24日号の『週刊金曜日』の「論争」欄に掲載された。再度、ホームページに載せたい。藤原彰著の『餓死（うえじに）した英霊たち』を読んだ。アジア太平洋戦争における日本人の死者数は310万人、その内、軍人軍属の戦没者は230万人と公式発表されている。藤原氏は詳しく調べ、戦没した230万人の内、6割強が餓死したと報告している。参謀本部は机上の攻撃至上主義の作戦を立て、兵士を送りこんだ。ところが、食料、弾薬の補給計画、手段を軽視し、兵站線を持たなかった。火力、物量の差は大きく、玉砕し、飢え死にしていっていった。国から見捨てられた戦争を強いられた訳である。兵士たちの恐怖と苦悩は計り知れない。彼らの声なき叫びに心を澄まして聞かなければならない。アジア地域で、日本人死者の7倍、2千万人を超える人々が死んでいる。彼らの無念さはいかばかりであろうか。戦争は決して起こしてはならない。

南京虐殺、日本軍「慰安婦」、沖縄戦での集団強制死などはなかったと言い張る歴史修正主義者がいまだにいる。理解できなくはない。自分たちは過去に「間違っただけではしていない」と考えなければ、立ちゆかなくも思っているからであろう。「歴史は現在が作る」という言葉があるように、過去は現在からいかようにも解釈できる。だが、過去を正確に見つめなければ、理不尽な苦難を負い、無残に死んでいった人々の声はかき消されてしまう。

天皇・皇后のパラオ慰霊訪問が、連日、新聞やテレビなどで大々的に報道された。パラオのペリリュー島では、米軍の進撃を受けた日本軍は塹壕や洞窟に身を隠し、ゲリラ戦で戦った。日本兵は約1万人、米軍は約1千7百人が戦死。生還した日本兵は34名の地獄であった。天皇は、この地の慰霊を実現させることが長年の願いであったという。そして、過去の戦争について「決して忘れてはならないと思います」と語り、平和への厚い思いがあることを示した。また、日本兵だけでなく、米兵慰霊もしたという。

安倍晋三政権は、過去の戦争で間違っただけではしていないと言い、これから戦争のできる国にしようと目論んでいる。そのためには、憲法改定が必要だと主張している。天皇は憲法99条で規定されているように「憲法尊重擁護義務」を負っている。そして、憲法擁護の発言をしばしばしている。安倍政権の目論みに歯止めをかける意図があるのではないかと憶測してしまう。靖国神社は日本国、天皇のために死んだ人々を祀っているが、これに対して今回の慰霊訪問では、すべての死者を慰霊することにより、天皇の思いが「世界平和」に通じているようにも受け止められる。とはいえ、それでも、大きな疑問はぬぐえない。なぜ戦争が起こったのか、誰が戦争を起したのか、誰がそれを支持し、誰の名によって戦争が進められたのか、なぜパラオに送られた兵士は砲弾を浴び肉片を散らしたのか。なぜ病氣と飢えで死ななければならなかったのか…。これらの「なぜ」をまず真摯に問わなければならない。生と死の淵で兵士たちが声にしたかったのは「自分たちのような戦死者を出してくれるな」ではなかったか。このメッセージを謙虚に受け止めることが真の慰霊ではないか。今を生きている者の責任ではないか。私は、そのように考えている。

天皇の慰霊訪問に感謝、感激しているだけでは、自分の歩む道を見失う。「思し召し」に納得することなく、主権を持つ国民が想像力を働かせ、慰霊する時、戦死者のさまざま声が甦る。天皇、皇后によるパラオ慰霊の旅は異常な報道ぶりだった。私は、国民の主権が吹っ飛んでしまっているのではないかと恐怖を感じた。